

昭和2年11月から昭和5年10月にわたって、『おさしづ』書は全33巻として刊行された。それ以前、信者たちの間には、「おさしづ」が写しとして流布していた。その点については、今までの、地方に所在している教理文書を紹介してきたところから、明らかであろう。

問題は、こうした「おさしづ」の写しがどのようにして、それぞれに弘まっていたのか。また、地方に残されている「写し」が、それぞれに関係するものだけだとみられていたが、その内容を検討するとき、それは単なる思い込みであったことが、明らかになった。つまり「刻限話」等を含めて、本部全体に関わる事柄、個人などの身上願なども、そこには収録されているのであった。直接「おさしづ」をいただいた個人なりが、その「写し」を所蔵しているのは、ある意味、当然である。しかし、そこに自らに直接関わらない「おさしづ」も収録されていることに注意しておきたい。

考えてみるに、「おさしづ」は親神、教祖の言葉である。信者たちに、その言葉を知りたいという欲求があっても、これは不思議でない。否、その言葉が一般に公開されていなかっただけに（とって、秘密にされていたわけでもない）、なおその欲求は強いものがあつたであろう。そうした点を考えるとき、いろいろな「おさしづ」が「写し」として、信者の間に弘まり流布していったことは、ある意味、当然のこととして理解できるだろう。

そして、その「写し」の流れを探求するという試みは、その膨大さを感じる時、ほとんど不可能であるかのように思われる。しかも正統な『おさしづ』書が刊行されている今日、「写し」の翻刻を試みても、そう大した意味があるとも思えない、という主張があるだろう。しかし、ただそれを放置しておくわけにもいかない。というのは、教理の伝播の様子を知る上で貴重なものがあるといえるからである。

さらには、かつてこうした「写し」の文言を引用し、それを根拠として異端的論陣を展開したグループがあつたという、そうした歴史的な出来事もあり（本来的には、正統な教義書を編纂する意図のもとに「おふでさき」とともに刊行されていることはいままでの、そのことが『おさしづ』書公刊にいたる一つの背景とみられる点からも、「写し」の流れを考えてみようとする思いが一つのものとなってくるのである。

すなわち、写本の流れが少しでも、明らかになれば、との思いから、もう少し、紙面をお借りしたい。

そこで、今回取りあげようとするものは、かつて、その一部を紹介したこともある「北野文書」の中の一冊である。すでに北野分教会の初期の頃の布教・伝道が、「おさしづ」の写し、あるいは、「おふでさき」の写しを持参して、教を論じて、たすけにかかって教線を伸ばしていた。とくに病たすけにおいて、その病に対する、おさとしは、身体の病の個所に「おさしづ」「おふでさき」の写本を置いて、そして念じて、パッと開いて、そこのお言葉を手がかりに論しが展開された、と伝えられる。「大部少なくなった」とは前会長の言であつた。それでも、なお多くの「写し」が保存されている。

その中の一点を翻刻・紹介しよう。その写本に書名は記されていないが、比較的、同一年の「おさしづ」が、まとまって記

されている。その最初の「写し」が河原町の深谷源治郎の目のさわりの伺いであるのは、興味を惹く。北野分教会は河原町の所属でなく、梅谷大教会の所属教会であるからである。ここに、系統を超えて、こうした写本が流布していることを知る。

[北野文書、整理番号18] 無題。縦15.9cm 横11.8cm。青9行罫紙袋、四つ目糸綴じ。

最初に別席札の記録が記されている。当時の別席の様子を窺うことができる。そこから翻刻していこう。

梅谷部内

奈良県大和国 添上郡 東山村 字北野

喜多 改濟 森本儀市郎

明治三十一年 二十年

七月拾参日 席 鴻田

九月拾壹日 席 増井女

拾月拾九日 席 鴻田

拾壹月八日 席 辻

拾貳月六日 席 増野(1才)

明治卅二年 一月十一日 席 高井

二月貳日 席 宮森

三月拾四日 席 梅谷

四月十四日 席 諸井

四月拾五日 御本席 御取次人 三人 山澤 梅谷 増井
十四日の午後 梅谷様の傍聴ヲ乞ヒ 聞キマシタ

拾六日 午後三時三十分以北野支教会へ帰る(1ウ)

(2才)は空白。そして、(2ウ)から「おさしづ」が記載されている。

(1) 明治三十二年三月廿五日 川原町分教会深谷源治郎

目のさわり御願

さあへ尋るじ上へ身上にこゝろ糸んとゆふ ぢん上いづれへ事情 ぜんへさとしたる 年げん八なかきもの なれど ついへたつもの そのさい心にこを□ さきへも心にかゝり 日々であつたやろ さとしに一つのりがある をいへとゆふりがある(2ウ)

一日の日をもつて身上尋る いつにいつとハさとせん 心にりわある 月々の処にたとへてはかれ あちらこちらきているかとをもへハ かへらんらん 内々そもへむすびあひ たのしみあひ 一月二月三月それ半きとゆ とんだりでハないでよを聞わけ それへさきへへも 身上の事情よりたづねらこふゆさとしのりがあつたとあきら(3才)

かなりをさとし まんぞくをあたへてくれにんや 一つのまんぞくをあたへるよふ あちらにハ三日ヲ三日 半きへ七分とゆふ 七分三分八とゆりとをもうやろ 今まで長らへた処に三分 たのしんだ処に七分やで さあへこのり取つきも よふさとしてくれにやならんでへ(3ウ)

この「おさしづ」は、公刊本に記載あり。写し違いと思われる個所も若干ある。そこは意味が不明である。□は判読不能。